

# 願牛寺報

浄土真宗本願寺派茨城西組 大高山證誠院 願牛寺

No.1



本堂改修  
記念号

のどかな里を過ぎ  
城郭風の参道の坂を登ると  
左に梵鐘が見えてくる  
右には親鸞聖人御像  
その奥には  
本堂が静かに迎えてくれる  
広大な境内は  
竹林や樹々が生い茂り  
別世界を思わせる佇まい  
静謐に包まれ  
親鸞聖人の往時に思いを馳せる



# 本堂改修完成にあたって

大高山證誠院願牛寺住職

稲葉弘真

この度、ご門徒様をはじめ多くの方々のご支援をいただき、本堂の改修を無事行うことができました。

物心両面でいろいろとご支援下さった方々に心から感謝いたします。

現在の願牛寺の本堂は、明治24年6月に落雷により焼失した旧本堂のあとに仮に作られたもので、長い年月の経過によりすっかり老朽化しておりました。これまでも本堂再建の願いはありましたが、諸事情により困難を感じておりました。

そうは申しまでも、この数年は老朽化等の影響から屋根瓦の一部の破損や内陣床の歪み等が発生しておりました。その一つひとつに対応修理をした際に専門家のご意見を伺ったところ、現在の本堂の基礎や躯体は外見から想定された劣化や傷みに比べ、思いのほかにしっかりとしており、経年変化の影響をあまり受けていないということでした。本堂が長年の風雪に耐え、良い状態を維持してこられたのは、願牛寺の周りを取り巻く鬱蒼たる樹木のおかげであるともいわれております。

改修を終えた本堂

本堂の躯体がしっかりしていることが判明

したため、おりしも本堂回りの石組み整備を、真壁の千石匠様のご支援で行うのに並行して、建物の内外装の改修を行うこととしたものです。

当寺は、親鸞聖人が関東にご布教のためにおいでになられて創建され、願牛寺と寺号を定めてくださったという伝承のある寺ですが、今年に創建から800年の節目にあたる年も重なるものと推定されます。

そこで、願牛寺創建800年の節目の記念事業としても取り組む意義を密かに感じたという意味合いもありました。

工事に際しましては、工事を担当していただいた朝日建設様の関係者の方々や相山卓也様のご提案をいただき、最終的に大変落ち着いたものに仕上がったと感謝しております。

平成23年に梵鐘の再鋳再建を行い、今回の本堂改修により、当寺の基盤整備は一応の目標を達成したことになります。今後は、ご門徒様とともに、ますます親鸞聖人のみ教えをお伝えする寺として努めてまいりたいと思っております。



改修後の本堂内陣



# 「本当の幸せ」とは何か

現代において宗教は少し私たちの生活から疎遠のものになってきていると思います。家の宗教が何なのかについてご存じの方は、若い世代になるほど少ないように思います。

それだけ、家庭での宗教の位置づけが過去よりも低下しているのだと思いますし、残念ながらご葬儀の時だけの宗教になってるのが現実だと思います。

でも、若い世代でも最近はお寺や神社を訪ねるというのが流行っているという話も耳にします。この場合、開運、パワースポット、ご祈祷、おみくじなど、何かいいことがありそうな感じのする寺や神社が人気のようです。

しかしながら、皆さんの浄

土真宗の寺院は、開運もご祈祷もいわないし、おみくじさえもおいてないので、人気のある寺院にはなりにくいといえます。

人気のある寺院になって、多くの人に参詣していただく方が、寺の護持のためには良いのかもしれませんが、真宗の寺院がそういうお寺にならないのには理由があります。

理由は、浄土真宗をはじめられた親鸞聖人の「苦しみ・悲しみを除き心ゆたかに幸せになる」ための教えでは、開運もパワースポットもご祈祷もおみくじも必要のないものだからです。

では、なぜ必要がないのでしょうか。親鸞聖人が学ばれたお釈迦様の教えでは、「苦

学ぶ価値がここにあるのです。では、仏教でいうところの「自己中心的なものの見方」とはどのようなことをいうのでしょうか。簡単な例で説明しましょう。

人は、子供のころから物心がつけば「私」というものを意識し、「私の考え」「私の見方」「私のもの」というものがおとなになるほどに明確に出来上がってきます。

それと同時に「私」と「他人」を区別し、自己を意識し確立していきます。その確立した自己をもって、私達は身の回りに起こる様々なものごとを「好き」とか「嫌い」とか分別評価しながら人生を歩んでいきます。

その人生での判断基準は、好き嫌いでいえば、「私の考え」などに合うものは「いいもの」であり、合わないものは「嫌なもの」です。

例えば、健康・長生き・お金・名誉・自分をほめてくれる人や好きな人とか運のよさとかそういう自分に都合のよ

いものは「いいもの」であり、病氣、死、貧乏や、自分に批判的な人や運の悪さなど都合の悪いものは「嫌なもの」になります。自分の尺度での好き嫌いで、好きなものは「福は内」として身の周りに集め、嫌いなものは「鬼は外」とやって、関わらないようにしたいとしているのが我々の日常です。

この点はおとなも子供も同じです。自分にとって都合の「いいものを集めたい、嫌なものを遠ざけたい」というのは自分の欲望であり、この点で大変自己中心的なのです。



しかし、この欲望に基づいた心の動きは、「個性」でもあり、必ずしも悪いというばかりではないので、なかなか身勝手さに気づきにくいのです。

しかし、自分の都合ばかりを振り回してもうまくいくわけではありません。自分の思うようになれば、もちろん幸せですが、人生思うようなことばかりあるわけではありません。

金や権力で自分の思うように人をさせられる人もいるかもしれませんが、普通は長くは続きません。そして、思う

ようなことが実現できなければ、心には苦しみが生じます。

こうした思うようにならない状況を、お釈迦様は人間の苦しみとして、生老病死（老いる苦しみ、病気になる苦しみ、死ぬこと）・怨憎会苦（会いたくない人と会う苦しみ）・愛別離苦（愛するひとと別れる苦しみ）・求不得苦（求めるものがえられない苦しみ）などとして示してくださいました。

生老病死の例でいえば「生命には永遠はなく、若いもあれば病気もある」それが真実ですが、自分だけはそうでな

くありたいという、自己中心的な願いをもつので苦しむのです。

お釈迦様も親鸞聖人も、このような自分勝手さで、不幸を判定する人間の愚かさ、勝手さを見抜かれて、それで

は「本当の幸せ」にはなれませんが、ということをお教へくださっているのです。

大変簡単に言ってしまうと、「自分の自己中心的なもの見方に苦しみの原因があることに気づくこと」が「仏教で

のすくい」につながるのです。占いやまじないやおみくじは楽しいかもしれませんが、それに頼っていても、本当の解決にならないから親鸞聖人は必要ないとお示しくださっているのです。

## 常日頃から 有難うを感じられるように

今日目覚めてからのことを

思い返してください。今日は何回、有難うつていましたか。また、あなたはどんな場面で、有難うつていましたか。

私たちは感謝の言葉として有難うといます。有難うとは「ありがたい」が語源です。ありがたいとは「めったにないことが起きた」ということです。それが自分に起きた、それが「ありがたい」ということです。めったに起きないことが起きたことに対して感慨を込めて「有難う」と表現

するのです。

冒頭に「今日は何回有難うつていったか」と伺いました。なかには、有難うつて言っていない方もおられるかもしれませんが。そのような方からは「そんな感謝するようなことはなかった」という声が聞こえてきそうです。

このような方の場合、たぶんご自身の周りでおきていることは、お礼をいうようなことではなく、「当たり前」のことと考えておられるのではないのでしょうか

先日、電車のシルバーシー

トに若者から席を譲られた方が何も言わずに座られたのをみたことがあります。その方はシルバーシートの近くまできて、だれもなかなか譲らないのでご不満そうでした。気づいた若者が席を譲ったのですが、何も言わなかったのは「座るのが老人の権利」であるのに、なかなか譲られないことに少し怒っていたのかもしれません。

ご自身にとつては、自分が正しいという理屈がありますから、傍から見たときに感じる不自然さにはご本人は全く

参詣者を迎える親鸞聖人御像

気づきません。席を譲られて本来ならば喜ぶはずのところを、喜ぶどころか、反対に怒りの心さえいただいているようでした。

これでは、心は常に荒れてしまいます。この例は少し極端とは思いますが、私たちは多かれ少なかれ似たような感

覚を持ちがちになっているの

ではないでしょうか。有難う

つていえるひとでも、どのよ

うな時に、そういつているか

考えてみてください。ものを

もらったとき、自分の願いが

かなったときだけ、有難うつ

ていつたりしていませんか。

自分が出会った「めつたに

ない有難いこと」について、

自分の尺度で評価し、ありが

たいことの価値を判定してい

たりはしませんか。また、あ

まりに慣れてしまつて「めつ

たにないことの有難さ」を忘

れて、「当たり前」のように

思つてしまつたりしていい

でしょうか。また、ありがた

## 日本堂はどのくらいの大きさ？



願牛寺を訪ねてくださる近隣の方から、昔にお父さんやおじいさん達から聞いた話として、明治に落雷で焼失した今はなき本堂の話も教えていただくことがあります。焼失した本堂はとても大きな本堂で、焼失したときは3日3晩燃え続けたということでした。では、その本堂はどのくらいの大きさであつたのでしょうか。古文書を調べてみると、横9間縦10間の大きさであつたことがわかつています。

今回、江戸時代の絵図面などを基に、日本堂のあつたと推定される場所を囲つて大きさを再現しました。

場所は庫裏と墓地の間、参道を上がつてきた正面です。どうぞ現地に立たれて大きさを想像してみてください。

なお、今回の再現作業につきましては、親鸞聖人のお弟子として有名な山伏弁円(明法坊)のお寺である常陸大宮の法専寺の本多隆海ご住職のご指導ご支援をいただきました。ありがとうございました。



さの価値をお金などで換算して評価したりしてはいないでしょうか。

このような有難うを感じない考え方の背景には、自己中心的なものと考え方がありません。仏教では、自己中心的な考え方もつ人間の性質を、無明とよび、人の苦しみや悲しみを招くもとと教えています。

無明のところに振り回されている限り、自分で自分の人生に苦しみの種をまき、いつまでたつても求めている幸せが得られないということになります。親鸞聖人は、無明にまみれたご自身を含めた人間の実態を指摘され、自分の無明に気づくことの大切さを示してくださりました。

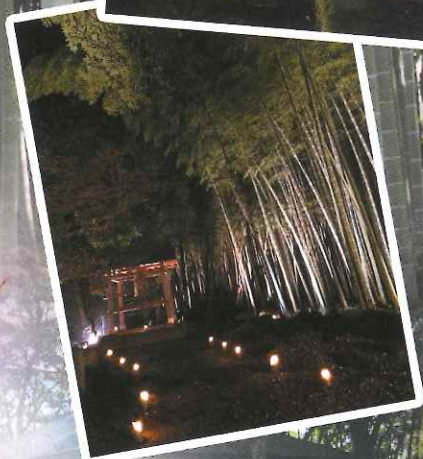
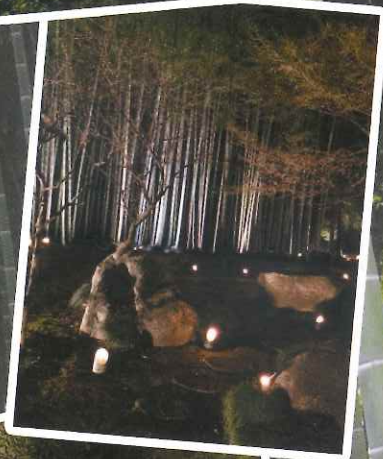
ご自身の周りで起きる様々なことに有難さを感じられるようになったとき、心には平安がもたらされます。どうか、有難うを感じられるような日々を過ごしていただきたく思います。

## 願牛寺公園墓地

### 近々拡張開始!!

## 除夜会のご案内

● 12月31日の大晦日に除夜会のお勤め(讚仏偈)を本堂にて行います。1年最後の報恩のお勤めをご一緒にいたしましょう。  
尚、恒例の除夜の鐘のライトアップは、日没後に行います。



● 除夜の鐘ライトアップ

## 元旦会のご案内

● 1月1日11時より、本堂にて元旦会のお勤め(正信偈六首引き)をいたします。新年最初のお勤めお待ちしております。



## 編集後記

▼この度の関東・東北豪雨で浸水被災されました方には、心からお見舞い申し上げますとともに、今もなお不便な生活をされている方がたくさんおられますが、1日も早く元の生活に戻られますようご祈念申し上げます。

▼ご門徒様のご理解とお力添えで長年の願いでありました本堂の改修ができ、これを記念して『願牛寺報』の創刊号ができ上がりました。これからも小誌を継続して発行すること、ご門徒の皆様と寺院との「架け橋」となれば幸いです。

▼連載として今号から開祖親鸞聖人の教えをわかりやすくご住職に執筆していただきます。ぜひお読みいただき、わかりにくいところがありませんたらどうぞ遠慮なくお寺を訪れてお聞きしましょう。

(合掌)

# 江戸時代の 大高山願牛寺全景図



二十四輩順拝図絵 (竹原春泉齋画 1803年)

この絵は、江戸時代(1803年)に出版された「二十四輩順拝図絵」に描かれた「願牛寺とその周辺図」です。

江戸時代の旅人は、このような本をもって親鸞聖人の関東の足跡を廻られたようで、この図絵は現在の観光ガイドブックのような位置づけであったと思われまます。ちなみに二十四輩とは、親鸞聖人のお弟子達を意味します。

二十四輩順拝図絵は、これらお弟子達の寺を中心にまとめた冊子ですが、このなかで願牛寺は、親鸞聖人の伝承である牛木(ウシボック)の図と雁嶋の図とともに3枚の絵が紹介されています。

ご覧の全景図には、右側に参道、本堂、庫裏、鐘楼堂や、現在も庫裏の前にある大きな檜の木までが描かれています。寺のある大高山の周辺、絵では黒っぽいところは沼で、沼のなかにはポツンと雁嶋も描かれています。

今は田に囲まれた願牛寺ですが、当時は寺の南・西・北を沼で囲まれたところに突き出したところだったことがわかります。

現在の風景と比較してみると、当時の面影が多く残っていることに気づきます。

注) ご覧の絵は日本画家の方に彩色していただいたもので原画には色がありません。

発行日 平成27年11月8日  
 発行 大岡山證誠院願牛寺 〒300-2722茨城県常総市蔵持6200の1  
 編集・制作 願牛寺編集部 印刷 八千代印刷株式会社

ホームページアドレス  
<http://www.gwanjyji.com>